「三八豪雪」の教えたもの

先日の京都での研究会で、宮本憲一先生が「災害論」について報告されたとき、三八豪雪についても質問した。先生は金沢大学で教えられていた頃で、自ら雪害を経験され、それが『社会資本論』などの理論にも活かされたという。北陸線が長い間ストップして、高山線だけが頼りだったという。

その頃、私は親父の転勤で名古屋から高山に引っ越し、中学生活を送っていた。一晩に 1 メートル近い積雪があり、名古屋で生まれ育ったので、驚いたことを覚えている。高山線沿いの自宅だけでなく、学校でも慣れない雪かきに追われたのが忘れられない。当時を振り返り、雪害について考えるため、宮本憲一『昭和の歴史 10 経済大国増補版』小学館、1989 年を抜粋して紹介したい。

三八豪雪　昭和38年、元禄以来の大雪で北陸地方は大雪害。除雪作業で混雑する金沢市内。

日本海側の過疎問題の引き金は、雪害にあるといわれるが、その象徴的な事件が、1963 年(昭和 38)の三八豪雪である。1963 年 1 月中旬から 2 月にかけて、元禄以来という大雪が日本海側をおそった。積雪量は金沢市で 181 センチにたっした。石川県の雪を、5 トンダンプカーで一列に並んで運び出すとすれば、地球を 107 周するといわれた。除雪体制の不備もあって、都市の機能は完全に麻痺し、山村は孤立してしまった。1 月 24 日、北陸線は全線運休し、1 か月間にわたって不通になるという近代史上空前の交通途絶となった。金沢市の都市交通も 3 週間ストップした。

燃料・主食・生鮮食料品の輸送難から物価は上昇した。雪は河川へすてていたが、やがて洪水の恐れのために中止され、路上に積もるにまかせた。人びとは二階の屋根の高さの道路を歩いて交通することになった。便壺は屎尿であふれ、ゴミ箱は廃棄物で一杯となったが、清掃作業はストップしたままであった。「雪害」ということばが、はじめて政治や社会の舞台で公認され対策がとられはじめた。

三八豪雪は元禄以来の降雪を根因としているが、その被害を拡大し深刻化したのは、高度成長による生産と生活の変化に、行政や民間の対策が適応していなかったためである。もともと北国の生産や生活は冬ごもり型であった。このような雪にそなえた生産や生活のあり方は、高度成長の過程で一変した。日本海側の生産や生活は、太平洋側と同じように画一化された。生活の都市化・画一化は、いっそう多くの困難をもたらした。

三八豪雪は、災害が社会資本の不足や都市構造の欠陥からおこることをしめすとともに、高度成長過程における地域経済の不均等な発展=地域格差問題を明らかにした。雪が降って孤立すれば生活困難となる経験をへて、日本海側の農村からの挙家離村がはげしくなった。それまでにも薪炭をつくる必要のなくなった山村は生業を失い、農家の流出はすでにはじまっていたが、三八豪雪は過疎化の幕を切って落としたといってよい。

(2020 年 1 月 28 日)